The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	語文　第4輯　編輯後記/投稿規定/奥付
Author(s)	
Citation	語文. 1951, 4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68392
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

編輯後記

秋も深くなって、今は疎林にもひとしい畝傍のなぞへからは、空もひときは広く澄んで見えるやうになった。人気のない山の際の木末に、百舌鳥のひと声がやむと、山のこころよい秋の吐息がきこえてくる。

かっては、こんもりと茂ってゐて、小道の下草を踏んで山頂に立てば、茶店も出てゐた見はらしのよい楽しい山。やがて、神の山と化して、人をも、ちかよせぬ畏き山。ついで、下草も何も苅り取られて、車をはこんでの盗木しきりの恐るべき山。

人に忘れられた今、初めて、百舌鳥は高らかに山のいぶきを秋の空におくる。

〃あはただしいこの国のいきづかひ。創作界の古典流行も結構です。文学研究の各論各説も結構です。強いやうで弱いのは人間の無意識心理。ジャアナリズムがけいかく的に吠え立ててゆくと、感も鈍って、うそもほんたうに見えてくるもの。学問の世界だけはと思ってもあやしいものです。もともと身勝手な理屈ずきの人間、それに……〃

野兎は小くびをかしげると、なぞへをかけあがって、妙な手つきで山裾をふりかへった。日だまりの野菊と萩が、明日香の風にひとしきりゆれ合ってゐる。

〃それに、いくら停電で暗いからといって、油を買ひにお菓子屋に飛びこんだりされては困ります。お菓子屋で油を売らないからとておこるにはあたらないこと。油は油屋、おかきは菓子屋。みんなめいめいの好みにあったお店。油も必需、お菓子も必需。屋号はかまへて、文献宿、歴史社会屋、文芸屋、民俗屋まだまだ。せめて学問の巷だけでも、お互ひの特色に　もたれあひ助けあってトレランスのエチケットを発揮しませう。せめて、文化の田舎ではなくて文化の都では、ね。また、せめてここだけは、うそをほんたうと思ひこまないやうにしませう。どんなに世相があはただしくても。〃

日の暮になって、木の葉がさやぎ、風が吹かうとしてもいい。山は人に忘れられて、初めて、千古の美をよそほふ。いまのは百舌鳥の声。疎林の間のあの夕空の茜色は……日本の秋。

×

前号予告の横山氏の稿は編輯の都合で次号に廻した。御諒恕を乞ふ。

（犬養記）

◇投稿規定◇

○直接購読者は投稿することができる。
○原稿の内容は国語・国文学、国語教育に関するものであること。分量は四百詰原稿用紙二十枚以内とする。
○原稿の送り先は「豊中市柴原、大阪大学文学部国文学研究室内、語文編輯委員」宛。
○原稿の採否は編輯委員に一任のこと。
○採用しなかった原稿は返送料が添附してあれば返送に応ずる。
○一括購読者が投稿する際には代表者から紹介せられたい。

◆雑誌の寄贈・交換について
○雑誌の寄贈・交換は大阪府豊中市柴原　大阪大学文学部　国文学研究室宛に願いたい。

◆購読について
○購読希望者は発行所宛前金を添えて申込むこと。
（送金は振替を利用されたい）
一部　四十円　送料八円
一年分（四回分）百六十円（送料共）
○五冊以上一括購読の時は一割引の上送料は不要とする。

語文　第四輯　定価四十円　送料八円

昭和二十六年十一月廿五日印刷
昭和二十六年十一月三十日発行

編輯者　大阪府豊中市柴原　大阪大学文学部国文学研究室　代表　小島吉雄
発行者　前田春雄
印刷所　寿印刷株式会社

発行所
邦進社
電話船場(25)1990番
振替大阪123135番